

葉集を読む

松岡 隆子

声にしておのれ励ます酷暑かな

宮田 悦子

歳時記を見ると酷暑は猛暑と共に極暑の傍題となつてゐる。共に夏の極みの厳しい暑さを意味するが、それぞれに微妙なニュアンスがある。自分の言いたいことを的確に受け止めてくれるのはどの言葉かよく考える必要がある。声を発して立ち向かわなければ負けてしまいそうな厳しい暑さと言えば、やはり酷暑であろう。酷暑には耐え難い暑さのイメージがある。掲句は酷暑という季語の選択によつて揺るぎない一句となった。

琅玕の葉擦れ清けし寺涼し

醍醐喜美枝

青々と伸びた若竹の美しさは琅玕と呼ぶに相応しい。降りそそぐ日差しを鏤めながらさやさやと風にそよぐ葉擦れの音を聴いていると涼やかな気分になる。琅玕、清けし、涼し、という言葉がそれぞれに響き合い端正な一句を成している。醍醐さんは写生句を得意とされる方だが、その言葉の使い

方には繊細な感性が感じられる。

裏返しゆく干梅の一日目

宮崎美智子

梅干を作る工程の中で梅を干す作業は最も手間がかかる。〈三日三晩の土用干し〉と言われるように、梅雨明けを待つて、三日間ほど晴れの続く日を見計らい土用干しをする。梅の量にもよるだろうが、夏の暑い日差しのなか一つ一つ丁寧に梅を並べ、また一つ一つ裏返してゆくのは根気と気力を要する作業である。

宮崎さんの土用干しはいま始まったばかり。〈裏返しゆく〉という具体的な描写に、次々と梅を裏返してゆく生き生きとした手つきが見える。下五の〈一日目〉の名詞止めは、二日目、三日目と続く作業を思わせ効果的だ。梅干の出来上がり具合は三日三晩の晴天にかかっているのである。

短夜の夢に來し人忘じけり

堀 真智子

せつかく良い夢を見ていたのに目が覚めるや否や幻のように消えてしまった。やっと会えた人だった。懐かしい人だった。それなのにそれが誰だったか、どんな夢だったか全く思い出せないのは何とも悔しい。ただ夢を見たことは間違いない。臆気ながら良い夢だった。

実体のない夢を俳句に詠むのは難しい。その俳句を読み解くのは更に難しい。斯くして曖昧な鑑賞になった。